妖劍紀聞　前編

泉鏡花作

一

花は、何んだと言つて、花に嫌な花と言ふのはありませんが、私は幼い時から、杜若の花が大好きです。金屏風に活けたのも、園生の池に咲いたのも、いづれ選好みをする事はありませんやうなものゝ、田の野川、麓の小流、丸木橋の袖などにひとり、紫の色も香も淑ましやかに、はら／＼開いたのは、一寸した旅や、野掛の道などで、ふと逢ひますと、水は淺くても淀んで居ても、深く忘られぬ馴染のやうな氣がして、其のまゝには通り切れず、何んとなく視めて居るうちに可懷いやうな、床いやうな、そして小兒に返つた氣がして、嬉しい中にも、もの寂いやうで、涙ぐましいまで、暖かな日も身に泌みます。

其が、此の頃、此の話を聞きました。　ー　其の中に、あり／＼と其處に咲いて、目に見えるやうな杜若があるのです。五六軒、賤が伏屋とも申すべ

き一廓の小家の前後に、門背戸を静に流れる細い水がありまして、一瀬颯と玉を散らして灌ぐ處、其の杜若に對して、若い、美しい着痩せの、すつきりとした鳥追が彳むで居ます。　ーー　姿と景色に、胸のせまるやうな思がしました。かほよ花とさへ言ひます、其の由縁の色を、うまく寫せますか何うか、分りませんが　ーー　では、お物語をいたします。

ーー　中にお化も一寸出ます、又かとおつしやつては不可ません。　ーー

場所は、現今の小石川關口の瀧　ーー　去年あたりから公園に成りました。　ーー　以前は大洗堰と言つた、あれから駒塚橋を渡つて、井の頭の、あの上水べりを、崖から目白臺へ抜ける間道が、其の杜若が咲き、娘の鳥追が立つた處であります。

時は寛政の五年卯月七日の事なのであります。時節柄、降續いた卯の花くだしが此の朝さらりと霽りました。花紫の濡色も思はれる、お話も、すぐ其の場所へ參りたいのでありますが、間に少々道行があ

ります。

扨て、雨は晴れましたが、夜霽りと言ふので、戸外は嚇と眩いくらゐな、それで居て何處となく、しつとりして、日向は少し汗の出る、些と蒸しますくらゐな陽氣で、牛込赤城下から、鐵砲の組屋敷を、今の中里へ掛ると、最う此の道が畷なのでありました。廣々とした早苗の青田で、其の一方の奥に、小藪のやうに青々と茂つたのは茗荷畠。早稲田を掛けて目白の森が、ぽツと薄煙りに煙つて、大日坂上に午やゝ過ぐる、陽の輝に、崖の土が薄赤う染まつたのは、やがて咲出でむとする躑躅の、行く春のなごりに思亂るゝ陽炎に又ほんのりと血を通はす、初夏の色であります、遠く視めても薄り暑さを覺える、其處を涼しく彩つて、蒼空の下に翠を流すのは、音羽九町を見通しの辻の柳でありました。中里の此の畷筋を、描いたやうに三個の人が通る。

一人は武家で、一人は道行を着た法體で、一人は小姓風采の美少年であります。武家と少年は足駄掛で、坊さん頭の就中脊の低いのが雪駄穿で、ちやら

りと先達に立つた處は、状を變へ、姿を窶した、微行の辨財天と毘沙門天に、野幇間がついたやうに見えますが、何として、坊さんは、そんなのではありません。

其の坊さんが、前途に袖を開きながら、

「御覽せい。・・・・・田畠を見通しの、づゝと、あの、青んだ裡に、何となく水氣が立つて、此の陽氣ゆゑに、ふは／＼と靄が動くやうに見えませうな。あれが關口の大洗堰でありますよ。いや武藏野の、それ、遁水と言ふ、昔の面影が偲ばれます。」

武家が、

「如何にも。」

と眉を展ぺて言ひました、言ふ人たちも、餘所目には、日影に映る遁水の、水田の縁を、薄靄に裏まれて通るのでありました。

二

坊さんは眉の嚴い割に、ふつくりした頬で、莞爾〳〵しながら、

「又、あれなる水氣の中に、船を俯向けにしたやうに屋根が見えますな。あれが即ち水車小屋であります。豐島屋半兵衛と言ふのが、名代の箱樋を用ゐて、井の頭上水を引いて、水車の大きなのを繰りますが、此は見事ぢや。依て、何と、御代々の將軍家、公が御見物にお成り遊ばされますぞ。」

と眉を伏せて、一寸頭を下げましたので。

「は、はあ。」　と武家が敬ふやうに應じます。

「水車あればこそぢや、粉屋風情が、冥伽に餘ると言はうか、恐多いと申さうか、申すも難有い事で。ためにな、御成門を立派にしつらへて、此は不斷、錠を下ろして注連を結うてありますて、いづれ道すがらお目に掛けます。又些と間を置いて、五六本樹立の中の、堂の屋根が一つ見えませう。瀧本院と申して不動堂ぢや。瀧不動、瀧不動と言ひますよ。別當は、武骨な逞い修驗ぢやが、矢張り斯の流儀を嗜

みますので、なか／／話せます。御堂へも道すがら参詣して、庫裏で一服なども可うございませう。」

と話しながら中里の畷を行きます。道しるべに立つた扨て此の坊さんは、小日向水道町本法寺（浄土宗にて現存）の住職、後嗣に寺を譲つて、一時は石切橋邊の穀屋の庭内へ庵を結んで隠居したのでありますが、賣婦あがりだと言ふ、地主の女房の、成上りの、權高で傲慢なのと、濕地で小蛇が夥多しく、によろ／／と這廻るのに辟易して、當時は赤城明神の境内に閑居する、武城赤北眞人前廓然盡十方庵　大淨敬順衲老と此の人の書いた隨筆紀行の類には長い名がありますが、他は、其の俳號の以風さんと呼び、陰では一煎さんで通りました。

次第は　ー　石州流の茶道に事實堪納で、自から別に煎茶の一流を立てた、名譽の隠居。春秋の野掛遊山を好みました處から、手提げに拵へた疊昆爐、これで到る處、池、川、井戸の水を汲んで其の場で煎茶を樂む。また野蒲團と稱へて、桐油紙と木綿を裏表に手製で貼つて、雨には合羽、晴には道芝に敷

いて蒲團にして、腹這ひもすれば坐りもします。こゝで例の疊昆爐を開いて、一煎をいたす、（一煎をいたす）と言ふのが口癖、こゝに於て、人呼んで一煎さん。

但し、遊歴の都度、興の趣くに從つて、旅店、茶店の襖障子、堂宮の欄干、柱などに、矢立を取出し、以風と名告つて、愚にもつかない發句の樂がきをするのと、宗門敵で、無暗に日蓮宗の祖師と惡口を吐くほかには、罪のない坊さんでありました。

或日も、連の差支で、一人、向島白鬚あたりを徘徊し、綾瀬橋の眞中から、藥鑵に細綱で中流を汲んで、此を携へながら、關屋の里の日向を選んで、枯野に唯一人の坊さん、即ち野蒲團に著と構へ、疊昆爐に仕掛けて、例の一煎。得意の花橘を舌の先に味ひながら、あはれ、友もがな、人の來よかし、一椀振舞はむと野道の前後を〓すと、ぽく／＼通るものは、千住かへりの馬士か、葛西出の兄哥ばかり、唐突に呼び留めて、振舞はう、と言ふと、馬士は曳いた馬の腹を視め、兄哥は肥料桶の中を覗いて、もつ

けな顔で默つて行く。

田舍まはりの餡屋を呼んだが、しかも不思議がつて行抜けるのを、立つて追はうとすると、「わい、狐ぢや」　と此は音を上げて、餡屋の爺さん、遁げ狀にどてん、と、いや、見事に轉んだ。白藏主は苦笑と言ふ數奇者であります。

武家は大塚玄之進、此は可なり知行高の越前の藩士。相連れた美少年は、其の小姓でも又侍の子でもありません。玄之進が贔屓に引立てゝ居りました同國の住人たりし刀鍛冶の一人子で、高松清三郎と言ふのであります。父母ともに沒して、たよりない孤兒と成つたのを、玄之進が我が手許に引取つて、別に扶持するともなく、懇に世話をして居りました。其の少年を江戸詰に伴ふて東上したのであります。玄之進の心では、大都會に良き師匠を求めて、刀鍛冶の修行をさせやうではなくして、實は然うした美少年なのでありますから、寶生か、觀世か、いづれか、宗家に頼つて、弟子入させて、天晴れ、能役者に仕立て、やがて藩主の許に昵近させたい希望なの

であつたと言ひます。此事は　ーー　しかし豫め清三郎に旨を含め、少年も其の志で居たか何うかは、此の話の前後の模様ではよく分りません。大方は玄之進一人だけの胸中ではなかつたらうかと思はれる節があるのであります。

處で、玄之進も茶の道は同じ流儀に携つて、豫て十方庵　一煎坊宗匠と懇意な中でありましたが、月毎に七日の日は、赤城の其の十方庵に、話の會と稱へる集合があつて、花、俳諧の宗匠たち、武家方は固より出家、醫師、當時の狂歌士詩人畫師、書家などから、不思議な禁厭をするのだの、灸點屋もあれば、講釋師も居る。俳優も交つて、一日を睦じく茶を煮て話しくらすと言ふ催しでありまして、いづれも世間つきあひの廣い人たち、屹度能樂の家元に知己もあつて、夫から便宜も得られやう心づもりで、清三郎を引合はせかた／〃＼、例日の今日、玄之進は朝から十方庵を音信れたのでありました。

掃除も屆き、釜も松風の音を立てゝ、坊さんは早く客を待構へて居たのでありましたけれど、此の日

に限つて、玄之進清三郎二人のほか、誰も定連の訪ふものがなかつたのであります。

午に成りました、十方庵は午餉の振舞をしたのでありました。再び話に花が咲いても、まだ立ち寄るものがなかつたので、久しぶりの好天氣、垂籠めてばかりも曲がなしと、玄之進が、まだ大洗堰の風景を見ず、目白の眺望を知らないと言ふ處から、十方庵が案内しやうと、例の疊昆爐、野蒲團を卷いて手提げにして、やがて二人を導びいたのでありました。

坊さんが、手提を片手に背伸をして、

「あれに・・・・・水音が最う聞こえますよ。」

三

瀧本院不動堂の參詣。關口の大瀧の見物を濟まして、此の三人の一行は、やがて駒留橋を渡つて、草の土手に掛りました。

水は陽炎を流したやうに、どんよりと一條、動くともなく靡いて居る・・・・・まことに同じ水が、もと來た方へ僅少の距離で、忽ちあの大瀧と成つて、一煽り轟と飜つて落ちて、すぐに江戸川に成つて流れやうとは思はれないくらゐ、もの靜か。坊さんの手には吹消す風の憂慮のない摺火打があつて、玄之進もともに銜煙管で、ーー　いつも坊さんの恁うした時の口癖の　ーー　（ふらめき）　ながら歩行きました。

時に、此の道すがら話しかはされました話題と言ふのは、不動堂の法印が留守だつた事であります。修驗にしろ法印にしろ、別當の用のあるのが出歩行くに何の不思議もないのでありますが、實は此の人たちに耳よりな事は、今度法印が思立つて、來る十

三日の午から、十方庵のひそみに習ふ、話の會を、御堂の別當に於て催す筈で、遠方は文づかひ、近まはりは法印が、自から案内に廻つて、それ／〻＼招くので、留寺も其がためと言ふのを、こゝに年久い老僕の、形は皺びて、布子は古いが、キビ／＼とした江戸前の口調で聞かされました。其が一つ。

・・・・・は可いとして、最う一つは、もの好でない限り、さして用のない處とは言ひながら、豐島家の大水車から掛けて、不動堂、大瀧の水筋二三町、餘りにもの寂しく、人ツ子一人通らない。參詣のものもなし、草も餘所よりは丈のびて、水も暗いやうに見え、御堂の鰐口も淵に臨んで口を開けるか、と思はれて、森閑として人氣勢もなく、裏へ廻ると、其の老僕が、みいらの如く縁の日南に乾びついて居ましたほどで。

例年は最う此の時節に成ると、瀧口に垢離を取る信心／〻なのが少くない。網で雑魚を掬ふものもあれば、水車寄の流には、婦たちの洗濯をするのが多い。小屋番がからかつて、水をかけ合ふ。繁吹もさゞめい

て賑かなのでありますのに、何うした事か、と坊さんが、件の老僕に尋ねますと、其の時、眉を顰めて老僕の話しました事が、其から此處へ・・・・・歩行きながらの主なる話題に上りましたのでありますが。

堰の落口が二つに成つて居て、大瀧小瀧と言ひました。一條は巾一間ばかり、一條は三尺餘り、高さ各々九尺　ー　勿論これは見物をして通つて來たので、當日は雨上りの濁水勢猛に、凄い音を立てゝ、水嵩も日頃に倍し、彳む足許を震はすばかりで、久しく見るに耐へなかつたと申します。　ー　瀧が不動堂の方へ二三間落つる處に、並んで水底の穴が二個あります。大瀧の下が大鉛盤で、毎年こゝへ引込れて溺れて人死が多いので、昔から堰口の魔所と稱へる。・・・・・誰も知つて、恐れて避けるのでありますけれども、夏場は泳ぐもの、螢に遊ぶもの、男女とも四五人は屹と命を落します。然るに、一昨年去年と續けて、人死の數が激に殖へて、八九人と成り、今年は水ぬるむ頃から今に及んで六人を數へた可恐しさ。水へ入る處の沙汰ではありません、岸

を行くものさへ足すくみ目くるめく、と言ふのでありますから、卯月の白晝の幻の暗闇かと疑はれて、瀬に散る波も山茨の花白く、里の卯の花のこぼるゝ風情して、大江戸小石川水道町の町はづれが、直ちに深山路の光景を見せたのは無理もないやうに思はれるのでありました。

「話は半分とな、實は存じて居りましたよ。風説は聞かぬでもありませなんだが。」

と赤城の坊さんが、こゝに其の沙汰最中、改めて舌を捲いて申します。

「私方なども、薄々申傳へるやうに存じますが、現在其の場に立向うて見もし聞きもしたので駭きました。」

と此は越前の國の住人邸は常盤橋うちに住居する玄之進が應じました。……朝晴れに足駄穿で出向いたゞけ、此の方は赤城より人捕穴の風説も遠い。

少年は黙つて水を見ながら歩行いて居ました。黒

小袖の紋着に萠黄の袴、臘鞘の細身の一腰、と言ふ姿が、目白の崖下の草の汀に水際立つて、瀧から、いや、其の水の穴から、抜出した、ものゝ精のやうに綺麗に見える。髪艶やかに色白く、眉の秀でた細面。

四

「川幅でも積られます。したゝかな大穴とも存ぜられんが、石瓦などで口を塞ぐと申す方角はないものでござらうか。」

と玄之進が言ふ下に、

「いや／＼、其は既に試みました。」

「はゝあ、如何様、町々、或は講中の企てゞ。」

「なか／＼然やうな輕々しい事ではありません。恐れながら御公儀に於て。」

「ホゝウ、それは／＼。」

「偶々御承知でもありませうが、先年此の小石川切支丹阪下の切支丹屋敷がお取壊しに成りました。其砌夥多い捨石を、幾輛ともなく車に積んで、あれから第六天、私が先住の本法寺前からづゝと曳出いて、此で大鉛盤小鉛盤を埋めたのであります。御公儀の思召は廣大ぢや、三日ばかり續きました。車の通る町筋は豪い賑かで、祭禮のやうに提灯を點ける。高張を立てる、見物も夥多しく出でました。町家の

小兒たちは旗を振つて騒いだもので、誰が教へるともなく、旗には河童退治と書きました。私はまだ其の頃、石切橋に居たが、近所の腕白ものに頼まれて、河童退治、其の旗を戯れに認めますのに、河童、河伯、河太郎、妙でない、水虎の字を當てました、水虎退治。」

「成程。」

「何せい、公儀の御威光ぢや。さしもの魔の穴も、水面に裝上るほど、切支丹屋敷の其の捨石で埋まりましてな、水は瀬となり、石に激して、親獅子兒獅子の頭毛を亂すやうに波を立てた。私も現に見ました。不動堂の縁から、法印と並んで此を視ながら、御公儀のお慈悲なれば、魔所も今は神の庭、祭禮の舞臺に舞を舞ふよ、と漫に感涙に咽んだのでありますが、何と其が、翌朝、二日目、三日目の朝には、夢のやうに波も消えて、石は缺片一つ影もない。二つの穴はもとの通り、黄昏時の藍瓶のやうに、靜まり返つたのでありますよ。此の事は、しかし、餘り世上に沙汰をしませぬ。水虎が馬鹿にしたやうで、

御威光にかゝはらうかの遠慮から、至極と思はれます。

私も赤城へ越しました。

此が一昨年、昨年今年と續けて、然やうに人を殺すと言ふは、魔の穴が、世俗に申す、面當をいたすやうで、何とも言語同斷な儀でありますが、扨て、其にしては世上の取沙汰が割合に靜なのは不思議なやうで、時々出會まする法印までが、然ほどには話もいたさなんだが、何う言ふものでありますかな。まのあたり視て、餘りの寂寞さ、一驚を吃しました て。」

と、うしろ見られる趣で、早く渡越した駒留橋の、其さへ魔界を隔つ怪い横雲のやうな思で振向きますのと、ともに玄之進は誘はれて見返りました。

「いや御坊、其は恁やうでござらう。堂の留守番のあの老僕の。口振でも察せられました。　ーー きはどく人の死ぬことを申立てるのは・・・・・一

度穴をお塞ぎ下された、其のな、將軍家の御威光を饒舌るものゝ口からも蔑にするやに相當つて、憚多いためゆゑに相違ござらん。しかし、其の中で、茶話の一會は、・・・・・法印一段の風流でござるな。」

「何か仔細がありませう、此には・・・・・」

と一煎坊は打案ずる體で、

「唯今の如き有様では、引續き參詣も絶えて、御堂とても立行きますまい。法印が催します會と言ふはわれら、別懇のものを招いて、何か相談事かも分りませぬ。すれば魔ものを對手の事ぢや。丸腰長袖の輩は一同ものゝ用に立ちさうにもありませぬ。話をお慰みかた／〃＼、あなたにも御參會が願はれまいか。」

「お邪魔でなくば、參りませう。お役には立ちますまいが。」

「いや／＼お腰のものだけでも、どんなに心強いか知れませぬ。」

「彼處にお宮がございますね。」
と清三郎がはじめて言つた。立向つた崖の上には二株の大銀杏が、並んでスツクと中空に高き石段を包んで聳えた、奥に、咲殘つた紅椿を、ちら／＼と、屋根に鏤めた森の中の祠が見えます。

「おゝ、椿の宮。」
「神様は？」
「八幡宮。」
「氏神様。」

と俯向いて、掌に額を當てました。清三郎の臈丈けた姿を熟と視ながら、一煎坊は、うつかりしたのが偶と心着いたやうに、
「さ、此の阪を目白へ上ります。・・・・・胸突阪と申すが、御覽の通り、些と足駄では御難儀ぢや。」

五

處が、雪駄の難儀な事は、足駄穿のやうなものでは無かつたのであります。

「あれ／＼。」

一煎坊は坂を抱くやうにして、腰で泳いで、

「あれ／＼、此は、辷る。」

「、辷りますな。」

と玄之進も行惱んで、

「いやどツこい。」

「どツこい、」

と拍子に掛つて、一煎坊が、ぱつちの尻端折に成つた時は、玄之進が袴の股立を取りました。此の方は一歩ぐらゐづゝ辛くも上るが、一煎坊と來た日には、

「これは、辷る。」

辷るとばかりで、つるり／＼と蛙股に脚を捻り、手を掛けずに足袋を脱ぐ輕業と云つた形で、雪駄を土に持扱つて、

「辷る／＼、なか／＼、辷る、これは一通りでない。」

と汗を掻いて眞赤に成る、と背後から、背中を押さうかとする様に、ト然う思つたらしく立つた清三郎が、

「御坊さま、私が背負をして差上げませう。」

「や、戯れを。」

と苦笑をしながら、

「背は低うても、私はこれ肥つた方ぢや。其の細りとしたのが、何として、串戯ばかり、其處どころではないて、どつこい。」

と又、辷る。

玄之進が横崖の笹の根に縋つて振向いた。

「背負ひませうとも、大丈夫。」

「ほう。」

「なりふりに似合はず、荒もので力がござる。・・・・・水泳などは、國表、九頭龍川の早瀬で鍛へて、宛如の河童・・・・・」

「あゝ、少時。聞いたばかりでも背筋の方が擽つたい。ーー扨は背負つても下されやうが、其の足駄穿で何として。」

「はだしに成れば、仔細はございませんから。」

と、澄ましたものでありました。

「何とも、何とも。」

藻掻いて、辷る兩足を踏留めると、其の志を頂いて手を上げましたが、

「御深切は忝ないが、法師が此の體で、眞日中に此の阪を、あなたに背負はれて上つては、現世にあるまじい稀有な形で、目白臺が魔の穴に成りかねません。ほう、いや、玄之進どの、案内者の不調法、申譯もありませぬが、直き此の路の傍に間道がありますよ。其を參れば仔細ない、樂々と參られます。御苦勞ながら、阪下へ一度お引返しを願ひませうかな。」

清三郎は流るゝやうに、最う衝と下りました。

玄之進とても、身體のあがきに振抜くまいと、刀の柄前に手を掛けつゝ、願はくば抜いて切つて竹の杖でも拵へたい處なので、一議のあらう筈はありません。

「辷りましたな。」

「すべりました。」

二人は吻と息を吐いて、此から、もとの土手を、崖について、小半町あとへ引返すと、小溝の流に一本橋が、一寸一跨ぎに架つて居ました。此處が所謂間道なので、

渡つて入ると、口許は狭く、内擴がりの一廓。ぽつとほてるぐらゐの日當りの赤土で、鮑貝のやうな形のなだらかな窪地で、草處々、縁は淺く、奥は崖を築いて樹林がこんもりと高い。其處を抜けて目白臺へ出らるゝのでありますが、其の周圍を環取つて、左に四軒右に三軒。

海邊だと繪に描いて、蛤が煙を噴きさうな茅茸の低い小家がありました。いづれも非人小屋、穢多の住居なのでありまして、唯これだけを、こぼれの宿とも呼びました。果敢さは斯る日南の中にも、北南いづれも、陰に成つて、家は穴のやうに薄暗いのでありますが、背戸から軒下を繞つて小川が流れて居ます。上水のあまりではなく、目白臺に湧く清水を、次第に引いて落したので、彼方此方筧を渡したのは、此を飲水にする事と、すぐに頸かれるのでありますが、二つばかり、何にするともなく、一抱、五月幟の飾のやうな水車を仕掛けましたのは、將軍のお成さへあると言ふ、近所のあの水車を見やう見眞似に、小供たちに慰みに見せるか、大人が樂むか、いづれにも、其の時代の人情では、狐狸が、なまじひ人間の眞似をするやうでものゝあはれが見えつゝも、ぎしり／＼と切齒をするやうに寂しく廻つて居たのであります。

が、此處の事で　ーー

清い流に二三輪、はら／＼咲いた杜若。

花の紫は、薄萠黄の葉ながら、根の霞に黄金粉を

刷いて、堆く、美しく見えました。最早や鮑貝のものではありません、此の景色は、御殿の大奥に、弄ばれた貝蔽の土佐の極彩色に似て、伏屋も玉の臺であります。

其の何の家も、仙人のかくれ家のやうに、日中、寂寞として居ましたつけ。

氣勢がしたので、戸口に鍋釜鑄掛もの、直しの荷のある、土間に向つて、一煎坊が聲を掛けました。

「あ、これ／＼通るよ。・・・・・胸突阪は雨上りで、如何も、辷つて歩かれぬ。通るよ、御免よ。構内を通るよ、此處を通して下さいよ。」

「はい。」

と聲さへ、紫の面影立つ、薄暗い土間に居て、ほんのりと面暫く返事をしました。　ーー　出家の姿も見えながら、いづれ世にある三人に、身を恥ぢて、はなじろんで、我家を楯に、其まで忍んだらしいのが、一煎坊の以ての外丁寧な挨拶に、隱れをほせな

かつたものと見えます。

「はい／＼。」

と若い聲で、尚ほ返事を疊んで、框に取つた三味線は、四ツ乳を白く小狗のやうに落したが、かぶり掛けた編笠は、忘れたやうに片手に取りつゝ、弱腰をすら／＼と、結立ての島田の艶、雫も嬌態もこぼれるやうに、杜若より目覺しく媚めいた鳥追の娘が、素足の雪に緋縮緬、小流の軒へ出ました。

「何うぞお通り遊ばして。」

「通るぞ。」

と玄之進も思はず言ひます。

「通るよ。」

「お靜においで遊ばしまし　ーー　」

口紅の影さへ水にさします、見送るやうに、慇懃に、淺黄鹿子の腰紐の小腰を屈めて會釋をしました。

「姉さん。」

清三郎が、何とした、つか／＼と引返した。引返

したと思ふと、流の岸に袴を折つて低く居て、

「あの、私に此の花を下さいませんか。」

武藏野の歌の風情を其のまゝに、紫の一本の、一輪こゝに咲いて居て、鳥追の娘とは、狭い　一つ橋を隔てゝ、男が却つて、根占めのやうに、水の活けたる、雙の花。

「えゝ、何の、まあ・・・・・」

と、顏を仰がれ目眩しさうに、颯と瞼の染まる時、美少年も、玉の如き額の汗を拭きました。

「おつしやる事はありません、お取りなさいましとも　ーー　と申しました處で、水にひとりで咲きました、まあ、私のものゝやうに差上げがましくつてお恥う存じます、　ーー　あれ貴方　ーー　」

折取らうとする葉も莖も、花のゆら／＼と流に靡いて撓ふを見て、

「根ごとお引きなさいましな。　ーー　いゝえ、それではお手が汚れませうねえ。お待ちなさいまし

よ、唯今。」

と、すつと入ると、急足の小刻みに、三味線の前を衝と引返して、持出づる薄刃の庖丁。

幽に手尖の震へながら、清三郎の掛けた手に、杜若の莖を持添へつゝ、せめては切る葉の長かれと、情を知つた婦の優しさ。颯と水面を削るやうに横状に當てた薄刃は、若鮎の白銀の背を閃めかして、指切をするやうに。血の湧くやうに水にちらめいた紅、揺らめく袖口だつたのであります。

「はい。」

「いゝえ。」

嗜みに持つた新い手拭を、手を清めよとて流越しに、

「はい。」　と出すのを、

「いゝえ。」

手は汚れはしませんと、清三郎は、袴のあひゞきに納めました、片手に花を捧げながら。

婦は爾時俯向いて、其の白地なのを銜えました。

「難有う。」

清三郎はスッと立つた、花はうつむけに持替へました。莖はまだ短いのに、其の紫の、地摺に見えたのは、水に宿つた心であります。

此の體を、一煎坊と玄之進は、遠い處に、人界、仙境、域を隔てゝ、百年も經つた昔を覗くやうに、影もぼやけて、二人立つて茫然と視めて居ました。

六

それから程もありません、我家を離れた、出口に近い水車の前に、三味線を小脇に、編笠を犇と眼深に、着流しの腰のきりゝとした、繪のやうな鳥追が一人彳むで、恍惚と奥の樹立を視ながら立つて居ました。

同じ娘なのであります。

然れば、美女である筈。小屋の、關口に近い處から、美しさをたとへて、濡髪の　ー　お町と言つて、町家、屋敷、山の手に人の知らないものゝない鳥追なのでありますから。

忽ち、吃驚して水を見ました。

目白へ續く崖の樹立から、瞳を水に伏せたのは、其の梢から颯と飛んで、ものが流れたやうな驚きやうでありました。

唯見ると、すら／＼と、なぞへの水を流れて來た、杜若の花が、はつと爪立つ、お町の足許を、辷つて、

花を裏返しに飜ると思ふと、瀬を潜り状に、其の水車に掛つて、くるりと一つ廻りました。

まだ早咲なので、莟を解いた花の數は、數へてお町が知つて居た。　ーー　苅つて棄てる薄さへ、三日の月、七日の頃は、水に一穂も落ちはせぬ。

其の人の立去つたあたりから、こゝに流れた杜若、流したぬしは知れませう。

「清三郎どの、今のは穢多ぢやぞ。御身が汚れる。」

「えゝ、汚らはしい、出世前だ。」

玄之進と諸聲の、言の下に、清三郎は、思はず手を離して水に棄てた。

杜若の花は又水車に廻りました、廻りつゝ玉なす雫を散らしたのであります。

お町は熟と視て居ました。

中肉に、清くあぶらづいた白い手を、思ふ状伸ば

したが、屆けば廻つて遁げるので、取はづし、取はづす・・・・・あの鳥目は手に渡すもの、土へ投げては屈めないで受取らぬと言つた　ーー　身を緊めて華奢に着痩自慢の鳥追の、身のこなしが隨意ならないので、立直つて三味線の轉進で、身をすぐに屹と壓へる、と水車は止まりました。途端にリンと響いたと思ふと、三の絲がプツリと切れた。

あはれ、其の絲で、葉の亂れかゝる杜若の根を結んで、懷紙に卷添へて、乳に屆くまで襟元深く、由縁の色を懷に、頤を花に埋むるばかり、痩せた桃の樹にトンと身を凭せて、悄乎して、締つた帶の間から同じ紫の絲入を取出すと、蕋を抜くかと、かへの絲、なよ／＼と手を擧げて、斜めに轉進を卷いた時、編笠を透く濃い睫毛の、ぱつちりとした目元から、其の花に、はら／＼と落ちた雫は玉の散るより輝きました。

此の時、大洗堰の瀧の音が、谺をするかと、二つ、二つの水底の穴に落ちるやうに、どゞと物凄く聞こえました。森を越えて目白臺まで屹と響いたに相違

ない。

七

此の日、椿八幡の大銀杏の高い梢に、夕鴉が胡麻を撒いたやうに、バツと騒いで、日は早稲田の森に沈むだ、黄昏時の事であります。

崖添の垢離場の土手に、朦朧と立つた婦が一人、帶を手繰つて弱腰をすらりと脱ぐと、捌けて曳いた裳とともに、撫肩をするりと落す。其處に色の燃ゆるやうな姿が見えたが、其も瀬の影に奪はれると、たゞ引結ふたは腰ばかり、眞白な雪の膚が、角ぐむ、蘆に膝から消えて、水に次第に沈む胸に、杜若の花を抱いて居て、ふつくりと乳の裏すく流の、やがて、それも沈みました。七日月の廣刃の鎌が閃いて、掻切つたやうに、痛々しくも首ばかり、頬にあてた花も黒髪の鬢はかくれて、瀧が音なく、姿見を並べて掛けると、人を捕る魔の大鉛盤小鉛盤が、ざつ／／と鳴るのでありました。

完】